自由の不確定な志向性
――「動的図式」と前期ベルクソン自由論

笠木　丈

L'intentionnalité　indéterminée de la liberté ―― le « schéma dynamique » et la notion de la liberté dans la première période de Bergson

Jo Kasagi

Cet article a pour but d'examiner le processus temporel et dynamique qui, d'une part, comme « hésitation » ou « délibération » aboutit continuellement à l'acte libre et, d'autre part, préforme cet acte comme « force » ou « effort ». Quand Bergson critique l'indifférentisme et le déterminisme associationiste dans l'*Essai*, ce processus joue un rôle très important. Toutefois, en un sens, celui-ci semble paradoxal et incertain, puisqu'il relève à la fois de l'indétermination et de l'intentionnalité.

D'abord, afin d'éclairer l'indétermination de l'acte libre dans *Matière et mémoire*, nous étudierons l'« affection » comme retard sur le mouvement réflexe, ainsi que la sélection des souvenirs, comme association par ressemblance. Puis, à la lumière de *Matière et mémoire*, nous approfondirons les notions du « schéma dynamique » et de l'« invention » dans *L'effort intellectuel*, pour examiner l'intentionnalité en rapport avec l'acte préformé. Nous montrerons ainsi les relations internes entre les textes de la première période de Bergson ou les divers aspects de la liberté bergsonienne qui sont le plus souvent considérés à part. Par là, nous verrons que c'est au cours du processus temporel que l'indétermination et l'intentionnalité s'unifient et qu'elles rendent possible une liberté non-indifférente.

序

ベルクソンの自由論が主題化される第一の主著、『意識に直接与えられたものについての試論』[1]（１８８９年）において論点の一角を構成するのが、無差別自由論と決定論の批判である。すなわち、ベルクソンによって批判の対象とされるのは、一方では連合主義的な決定論である。だが他方では、複数の行為を等しく選択することの可能性を主張する立場、すなわち無差別性によって自由を擁護する立場に対してもまた、同じく批判が向けられているのである。

しかし、無差別性ではないものとしたうえで厳密に自由を確保するためには、実際には相応の論理が必要となるだろう。というのも、無差別な自由を拒否するのであれば、行為を決定づける何らかの要因を導入せざるをえないのだが、そうすればおのずから行為はその要因によって決定されるように傾きかねないからである。

たしかに、ベルクソンはこうした問いを明示的に扱っているわけではない。しかし、無差別性を否定する自由論である限り、ベルクソンの議論に対してもまたこの問いは立てられる必要がある。実際、以下に述べるように〈不確定性〉と〈志向性〉と規定されうる自由の両義的な性質を『試論』のテキストは示唆している。ベルクソンの議論をひとまず認めるのなら、おそらくこの〈不確定性〉は無差別性と同義ではなく、また〈志向性〉は必然性を含意することはないのだろう。だとしても、やはりその先が問われねばならない。すなわち、本性上ともすれば相反しかねないこの両義性はいかにしてベルクソンのなかで折り合わされているのだろうか。このことが不確定性と志向性の内実とともに明らかにされねばならない。

結論を先取りすれば、自由行為の不確定性と志向性とが調停されるのは、行為に至るまでに経過する時間においてであると考えられる。周知のように時間の概念はベルクソンの自由論において決定的な役割を果たしており、それについてはすでに多くの研究が重ねられている[2]。本論においては、無差別的でない自由を可能にする、つまり不確定性と志向性を折り合わせるという点でもまた、時間は自由行為に対して重要な寄与を果たしていることを明らかにしたい。それによって、時間と自由の関係という周知の論点に対して新たな角度から光を投げかけることを試みる。そして、『試論』において時間と自由が交差するのは行為へ至るまでの過程、さらに言うなら時間のリアリティが正しく考慮されたうえでの行為への過程においてである。この点に着目し、行為へと至る過程の具体的な内実を検討することで本論は考察を展開することになる。

ただし、『試論』において自由行為への過程は必ずしも十分に語られているわけではない。というのも、『試論』では単なる心的状態の継起と行為への展開とは明確には区別されておらず、持続が実際に行為として外的に展開していく過程については不明瞭な点を残してい

るからである。そしてまた、行為への過程に導入される時間の概念は「持続」としての時間であり、それは不可分な連続的展開である。そのため、行為へと至る諸段階を――たとえば動機の吟味・躊躇・決意といったふうに――別々に区切られたものとして想定するならば、実際の過程を歪曲してしまうことになるのである。『試論』での議論の持つこうした性格によって、行為へと至る時間的過程は重要性を強調されつつも、その内実についてはある種の曖昧さが残されており、その過程はともすれば分節化を拒むブラックボックスのような印象を読み手に与えもするのである。そこで本論では、読解の対象を拡大し、第二主著『物質と記憶』（１８９６年）および論文「知的努力」（１９０２年）[3]をもあわせて検討する。そうすることで、それらのテキストの相互連関とあわせて、行為への時間的過程の内実を解明することを試みる。このように、ベルクソンの著作のなかでも心理学的記述が中心を占める、「前期」と括られうる諸テキストに関して本論では横断的な読解を行う。

このことはまた、ベルクソンの読解を新たに水路づける試みでもある。『試論』と『物質と記憶』の両者における自由論は互いに相貌を異にしており、議論に一定の断絶があるようにしばしば見なされてきた[4]。それに加え、『物質と記憶』と論文「知的努力」とは「意識の諸平面」や「注意」という概念を共有しながらも、両者を交差させる読解はいまだ十分には開拓されていないと思われる[5]。したがって、これらのテキストのうちに内的な連関を見いだすことはベルクソン解釈上、有意義であると考えられる。

以上のように、無差別ではない自由の成立根拠、時間と自由との関わり、自由行為への過程の内実、諸テキストの相互連関という、相互に絡まりあった論点について解明することが本論の課題である。

考察に先立って、本論の構成について述べておきたい。まず、第１章においては『試論』のテキストを検討する。連合主義的決定論、無差別自由論それぞれに対するベルクソンの批判を整理し、そのうえで自由行為へと至る過程からその不確定性、志向性を取り出し、同時にその問題性を指摘する。そして第２章では、『物質と記憶』へと考察を移行させる。反射的運動からの〈遅れ〉としてのアフェクシオン、そして類似連合による記憶の選択という観点から、不確定性の内実について検討する。第３章では、論文「知的努力」における「動的図式」に着目することで、今度は志向性について考察を加える。以上の過程を経て、自由の不確定性と志向性が時間のうちにおいて折り重ねられることが明らかになるだろう。

第１章　『試論』における、自由行為への動的過程

１-１　連合主義的決定論の批判と心的状態の変容

ベルクソンは『試論』において、ミルに代表させられる連合主義的決定論と無差別の自由の双方を批判している[6]。この批判が展開されるのは、『試論』では主に「実在的持続と偶然性」と題されたセクションである。まずはこの箇所を検討する。

ベルクソンは無差別自由論と連合主義的決定論の立場を次のように要約する。たとえば、Ｘ・Ｙという二つの異なった行為があり、そのうち行為Ｘが行われたとする。無差別自由論であれば、この二つの行為に関して、両者とも「等しく可能」（DI131）であったと考える。そのときに想定されているのは、先行するいかなる条件も関与することなく、行為の選択が行われるという事態である。それに対して、連合主義的決定論はこのように主張する。行為Ｘを選んだのなら、「そうする何らかの理由」（DI134）があったはずだ。つまり、行為Ｘに連合した何らかの心的状態がもともと存在したからこそ、その行為Ｘは行われたのである。このときに連合した心的状態が行為Ｘを必然的に決定づけていたのであり、したがって行為Ｙを選択するということはそもそも初めからありえなかったのである、と。

こうした議論に対して、ベルクソンは両者が共有している前提、すなわち、行為をＸやＹとして「記号化」（DI135）しているという前提を批判する。では、なぜ記号によるモデル化は批判されるのか。それは結局のところ、『試論』において最重要視される持続の展開過程、つまり行為へと至る「動的進展（progrès dynamique）」（DI136）を正しく捉えることができないからである。ベルクソンによる批判の核心はこの点に存している。

こうしたベルクソンの議論は、連合主義的決定論と無差別自由論の両者を、それらの前提にまで遡行し批判するという点に力点があり、実際、その点に議論の意義と独自性があることは確かである。とはいえ、ここでの議論においてベルクソンは単に両者の批判に終始しているだけではなく、みずからの積極的な立場を示唆してもいる。それが、この「動的進展」という語の指し示す事態である。ベルクソンの議論をミルの連合主義的決定論、そして無差別自由論と対比させることで、行為へと至る過程について、両者がどのような内実を捉え損ねているかを明らかにすることができるだろう。

ミルに関してベルクソンはこう批判する。ミルはなされるべき行為をあらかじめの所与として、「不変の記号」（DI132）によって置き換える。そして、行為を決定した、あるいは決定するとみなされる心的状態が想定される。これは、行為にとって事後的な観点から、不変の記号としての行為と、先行する心的状態を同じく不変のものとして対応付けることを含意している。つまり、行為を決定づける心的状態は、「自己同一的なものとしてとどま

る〔……〕事物と同一視されている」（DI128）のである。しかし、ベルクソンによれば実際の心的状態は「絶えず変化している」（DI132）。『試論』において持続として把握される心的状態は不可分な全体性を形成するのであるが、それは過去の総体を切り離すことのできない背景としている。そのため、心的状態は絶えず「その全過去によって強化され、大きくなる」（DI115-116）のであり、同一の状態は反復されず、不断に変容を遂げていく。この点で、ミルの議論は行為へ至るまでの心的状態の不断の変容を捉え損ねているのであり、そうした誤った前提の上で決定論を組み立てているのである。

だが、動的進展はただ反復不可能な心理状態の変容という事態のみを指し示しているわけではない。もちろん一面ではそうであるのだが、この変容の過程が同時にまた、まさに「動的進展」と呼ばれているように、行為へと向かってゆく過程であるという点にも注意が払われなければならない。そのことを明らかにするために、続いては無差別自由論とベルクソンの議論を、行為へと方向づけられた心的過程という観点から対照させたい。

１-２　無差別自由論の批判と心理的過程としての活動性

無差別自由論は複数の行為、たとえば行為Ｘと行為Ｙが等しく可能だとみなす。この立場はベルクソンによれば、次のようにモデル化される。自我は意識状態の系列ＭＯをたどり、点Ｏに達し、これからＸあるいはＹを選ぼうとしている。このとき、点Ｏから伸びている方向ＯＸとＯＹは「惰性で無関心で（indifférente）、ただわれわれの選択を待っている事物」だとされ、そこからは「自我の連続する、生き生きとした活動性（activité）」は取り除かれる（DI133）。つまり、行為に至るまでの一連の心的状態とされるＯＸ・ＯＹは、行為の選択に関与する契機として考慮されない。その代わりに、行為を決定する力は点Ｏにおける自我に帰せられる。それは「無差別な（indifférente）活動性」（DI134）、あるいはＸ・Ｙのどちらにも向けられた「二重の活動性」（ibid.）であり、行為の決定は、点Ｏにおける自我による、いかなる条件にもとらわれない選択にゆだねられる。無差別自由論においては、そうした二重の活動性を、行為に先行する意識状態ＯＸ・ＯＹとは無関係に持つことが想定されるのである。

このように行為を決定する活動性を点Ｏに位置づけることは、換言すれば、「自由行為のうちに継起的ないくつかの段階、すなわち、対立する動機の表象と、躊躇と、選択とを区別」（DI133）するということである。行為の「選択」は点Ｏという一点に局在化される。それによって、選択に先立つ「動機の表象」や「躊躇」と無関係とされるのであり、無関係に行われるからこそ先行条件にとらわれない無差別な選択が可能なのである。そのため、

無差別自由論にとって躊躇とはせいぜい、行為の決定へと関与しない「機械的動揺」（DI134）にすぎない。以上のように、無差別自由論にとって複数の行為が等しく可能であるのは、行為に先行する心的状態と無関係に行われるという点に由来している。だが、このような議論は、ある困難を抱えている。つまり、「無差別な活動性」を想定しているがために「もしも二つの道が等しく可能だったのなら、いかにして決定を行なったのか」（DI136）を説明できず、行為者はいわゆる「ビュリダンのロバ」と化してしまうのである[7]。

それに対してベルクソンは、「熟慮（délibération）」（DI136）や「躊躇（hésitations）」（DI132）という行為へ至る連続的な心理的過程そのものに、行為へと向かう「自我の生ける連続した活動性」（DI133）を見て取っている。すなわち、行為の契機となる活動性は、特定の瞬間における選択に局在化されるのではなく、連続する心理的過程それ自体のうちに織り込まれているのである[8]。そのため、熟慮や躊躇といったものは、無差別自由論におけるように、行為の決意とは明確に区別されない[9]。『試論』が描くところでは、自由行為はあたかも「熟れすぎた果実」（DI132）が落下するように「自然な進展によって」（DI129）行われるとされるが、それは自由行為の連続的な展開を表現していると考えられる。

このような連続的な展開過程こそが、「動的進展」と呼ばれるのであり、無差別自由論はこの過程を捉え損ねている。そして、先立つ心理的状態、すなわち動的に展開していく熟慮の過程は活動性であり、したがってその過程において私は行為へと差し向けられ、そこに至りつつある。この点で、ベルクソンの議論では無差別自由のように「ビュリダンのロバ」には陥らない。というのも、一方で無差別自由論は行為へと至る途上の心的過程を含む行為の先行状態を、行為の選択と無関係のものと見なすことによって、無差別な選択を確保していた。それに対して、ベルクソンにおいては、先行する動的な心的状態が活動性という形で行為を決定づけているからである[10]。もちろんこの場合、先行する心的状態はミルの場合とは異なり一定不変のものではないし、その状態と行為との必然的連合が成立しているわけではない。とはいえ、ベルクソンの議論においても心理的状態と行為とのあいだには因果性とも呼びうる関係が成立していることは確かである[11]。事実、『試論』の「実在的持続と因果性」と題されたセクションでは、心理的状態が行為へと至る過程に対して因果性という名が与えられている。続いて次節では、この箇所での議論について検討する。

１-３　「実在的持続と因果性」における、力としての先行形成

『試論』において因果性の観点から自由が論じられるのは、「実在的持続と因果性」と題されたセクションである。ただし、この箇所では冒頭の箇所（DI149-151）とそれ以降とで

は別種の議論がなされている。この点には注意が必要である。心的な状態に関しては、同一条件が反復されえないがゆえに、必然的決定をもたらす因果関係は内的な領域においては見出されることはない、こうした内容がまずは冒頭部で語られる。以上を手短に主張し終えた後、しかしベルクソンはその不十分さを認め、因果性の概念そのものの分析に取り掛かるのである（cf.DI152）[12]。すでにみたように、行為へと至るまでの心理的状態は、つねに変容してゆくという側面のみならず、行為へと向かう活動性としての性質をも備えているのだった。同様に、以下に検討するこのセクションの後半部分においても、まさしくただ異質的に推移してゆく心的過程という把握にとどまらない、行為へと向かう動的な過程について述べられている。ベルクソンの議論を続けて参照しよう。

ベルクソンは、二種類の因果性を区別するのだが、それは、原因のうちにおける結果の先行形成（préformation）の二形態として整理される。一方の因果性では、原因と結果は継起の関係ではなく数学的な内属関係を結ぶ。両者のあいだには必然的決定の関係が成立し、そこに持続が入り込む余地はない（cf.DI156-157）。この種の因果性においては、結果は原因のうちに完全な形で先行形成されているといえる。

それに対して、もう一方の因果性とそれに対応する先行形成が存在する。それは必然的決定を含意する因果性とは異なり、持続の一端をなす動的な因果性である（cf.DI164）。行為へと向かう動的な過程として、考察されるべきはこうした先行形成である。このような因果性において、なされるべき行為は意識のうちに与えられる力として先行的に形成される（cf.DI163）。つまり、行為への時間的な過程において私は行為に対して無関心＝無差別ではなく、力という動的なあり方で行為へと差し向けられている。しかもそれが、行為へと至る心理的な因果性として語られているのである。この点で、前節で確認した行為への展開過程と重なりあう事態がここでも語られているとみなされうる。ただし、このように規定される行為への動的な過程という概念には、重要な問題が内在している。それは、不確定性および志向性として整理しうる二つの要素が含まれているということに由来している。以下、順に指摘する。

まず、行為への動的な過程における不確定性が指摘できる。前節で見たように行為へと至る過程は躊躇や熟慮と呼ばれていたが、それらが可能であるためには、行為が不確定性を備えていることが必要だろう。なされるべき行為がすでに確定しているのなら、どうして躊躇し熟慮することが可能だろうか。そして、本節で述べた動的な先行形成に関してもベルクソンはその不確定な性格を描き出している。動的な先行形成はあくまで不完全であり、確実でない可能的な行為が描き出されるにすぎないというのである（cf.DI158-159）。だが、ここに問題が生じる。つまり、先行形成された行為の遂行に不確定な余地が与えられるのであれば、その行為を行うことも行わないことも可能であるという、ベルクソンが一旦批判したはずの無差別的な状況を再び議論に導入するようにも思われてしまうのである。

それに加えて、行為への過程は不確定性と同時に行為への志向性をも備えている。ベル

クソンは無差別自由論を批判しつつ、行為への過程においてなされうる行為へと差し向けられていると述べていた。さらに、動的な先行形成に関してはより明確に志向的な性格が述べられている。すなわち、なされる行為は、努力として展開していく観念として先行形成されると言われるのである（cf.DI158）。だが、こうした志向性は行為の記号的な表象を含意せずに済むのだろうか。１-１で述べたように、行為をあらかじめ与えられたものとしてみなす議論について、行為の記号的な表象であるとして批判していたのは、ほかならぬベルクソン自身ではないか。自由行為の志向的性格についてもまた、一見したところベルクソンの議論は曖昧で、自家撞着に陥りかねないように思われるのである。

このように、無差別自由論および決定論に対するベルクソンの批判は、上に述べた不確定性と志向性の内実次第ではベルクソン自身の議論についても回帰しかねない。こうした疑念を晴らすには、志向性と不確定性を備える行為への動的過程に関して、さらなる吟味を継続することが必要となる。ただし、その際には『試論』以降の著作をあわせて検討せねばならないだろう。

まず、不確定性に関していえば、『試論』が扱うのはせいぜい批判対象としての無差別的な選択にとどまっている。ベルクソンの主張する自由行為が本来備えているであろう不確定性や選択としての側面は、そこでは十分に展開されてはいない。そうした側面が前景化するのは第二主著『物質と記憶』においてである[13]。したがって、以下では『試論』のテキストをひとまず離れ、『物質と記憶』における選択としての自由についてまずは検討する。ただし、『物質と記憶』における自由論は『試論』の議論を継承しつつも、そこで自由行為として描かれる事態を十分にはカバーしきれていないように思われる。そのため、『物質と記憶』の議論を踏まえたうえで論文「知的努力」へと考察を延長し、そこで得られた視点によって不確定性を孕む熟慮の内実を明らかにする必要がある。

次に、行為への過程における志向性について。あらかじめ見通しを述べておくと、この志向性は、論文「知的努力」で登場し、知的努力を経由しながら展開する「動的図式」によって担われると考えられる。ただし、果たされるべき行為を先行的に指し示す「動的図式」は、自由の不確定性ないし選択性を通してのみ現実化する。こうして最終的には二つの論点は合流することになる。まずは、『物質と記憶』において不確定性のなかでの選択について考察し、そのうえで、論文「知的努力」へと移り、行為への志向性を内包する動的図式の展開過程について明らかにしたい。

第２章　『物質と記憶』におけるアフェクシオンと記憶の類似連合

２-１　時間における身体

『物質と記憶』において行為の選択は、一方では、身体の感覚運動的な機構を背景としたアフェクシオンとともに描かれている。そして他方では、行為の選択に関わる記憶の現実化のメカニズムが論じられている。まずは、より身体的なレベルでの不確定性や躊躇を表現していると思われるアフェクシオンの概念から検討していきたい。

『物質と記憶』の第一章でベルクソンは身体について、精神と関わる側面を捨象し、物質的次元のみを焦点化した考察を展開している。つまり、外的対象から作用を受け、反作用を外的対象へと送り返す運動的回路の総体として身体を捉えるのである。そのうえで、脳をはじめとして複雑に分化し発達した神経中枢を備える人間の身体においては、外的作用に対してそのつど複数の可能な反作用が許されている。身体的な行為のこのような不確定性の範囲を示す部分を照らしたものが知覚だとされる（cf.MM27-29）。だが、知覚によって表現されるような行為の不確定性は私たちの求める不確定性ではない。というのもそれは、純粋に物質的レベルでの不確定性であり、「気まぐれ（caprice）」（MM67）、すなわち持続と無関係な偶然性に他ならないからである。そこに不確定性はあったとしても躊躇しつつ行為へと至る私は存在しない。

だが、以上の観点は暫定的なものにすぎない。知覚の分析を終えたベルクソンは第二章冒頭にて流れる時間のなかに身体を位置づけなおす（cf.MM82）。そして、身体は継起する内的な持続のもっとも新しい延長部とみなされるのである（cf.MM83）。これは、身体が私の生きられた現在に位置づけられることを意味している。というのも、「私の現在」と呼ばれる生きられた現在は、身体についての意識と呼ばれるからである。さらに、「私の現在」は感覚としての直接的過去と、運動としての直接的未来から構成されており（cf.MM153）、そのため、「感覚-運動的」（MM156）と形容されている。感覚が運動として展開していく持続の先端としての現在、それについて私の持つ意識が生きられた私の現在なのである。このように時間的な展開過程のうちに置き直された身体を内側から私たちに提示するのがアフェクシオン（affection）[14]である（cf.MM11・63）。このアフェクシオンによって内側から知られる身体こそが、時間のうちに置き直された身体なのである。

2-2　アフェクシオン、遅れつつ展開する運動

時間のうちに置かれたとはいえ身体と関わるものであるがゆえに、知覚の場合と同じく、アフェクシオンもまた不確定な反作用を返しうる複雑化した神経系を前提としている。ベルクソンの挙げる「痛み」の例を参照しよう。感覚と運動を司る身体の部位が未分化な「アメーバの突起部のひとつに異物が触れるとき」、アメーバは即座に「刺激に対して反応を行う」（MM55）。だが、人間を含め、ある程度以上に進化した生物において、運動能力は感覚神経それ自体から分離されて、刺激に対して反射的に応じる運動から距離を取ることが可能となる。痛みが生じうるのはこうした身体機構においてである。ベルクソンによれば、痛みとは「傷つけられた要素が事態を回復しようとする努力――感覚神経に対する一種の運動的傾向」（MM56）なのである。刺激に対して反射的に動作を返すアメーバとは違って、即座に反応を返さない場合に生じるのがアフェクシオンであり、それは「局所的（local）」で「無力な努力（effort impuissant）」とも称されている（ibid.）。それは、外からの作用を即座に「反射」するのではなく、不動性のうちに、その作用のいくぶんかを「吸収している」のである（MM57）。

アフェクシオンはこのように、身体の不確定性を背景とした、反射運動からの隔たりによって特徴づけられる。だが、アフェクシオンの本性は「相対的な不動性」（MM56）だけに尽くされはしない。それは、あくまで行為へと向かう運動的傾向を前提とした上での隔たりなのである。そのことは、知覚とアフェクシオンを対比することで明らかになる。知覚とは、すでに述べたように身体の物理的な運動能力を反映した、可能的な作用（action possible）である。それは、外的な事物がいまだ身体に影響を及ぼしていない時点において描かれているものである。知覚される諸事物は私に対する作用の切迫度合いに応じて遠近法的に配列される（cf.MM57-58）。だが、ある時点において知覚はアフェクシオンに転じる。それは、外的な事物が私に対して作用を及ぼす時点である。このとき、作用は知覚として可能的に素描されることを止めて、現実に行われる。この意味で、アフェクシオンは私の身体的能力をただ可能的に反映させる知覚とは異なり、まさに行われつつある現実的な作用（action réelle）である。このように反射運動から隔たりつつも、なおかつ実際に作用しつつあるアフェクシオンは、単なる不動性というよりは、むしろある種の遅れとでも呼びうる性質を備えているのである。

以上が、アフェクシオンとしての痛みに関するベルクソンの理解である。だが、アフェクシオンは痛みという事例に限られるものではないだろう[15]。というのも、痛みの持つ性質に尽くされないと思われる、アフェクシオンのより積極的な側面が、テキストの別の箇所で語られているからである。それは、なされつつある身体的運動に対する私の「主導権」であり、それによって「新しいもの」を生み出すということである（MM12・cf.MM10-11）。

もちろん、痛みの例に見られたように、アフェクシオンは即座に返される反射運動から遅れながら行われつつある作用でもある。だがそうした側面に加えて、私の側からのより積極的な行為への介入もまたアフェクシオンにおいては可能とされるのである。

このように、アフェクシオンは複雑化した身体機構に由来する不確定性によって、反射的な行為から隔たり、遅れをともなった運動傾向である。しかも前節で述べたように、アフェクシオンにおいて身体は時間のうちに位置づけられているのだった。つまり、こうした身体的運動は、みずからの身体的感覚すなわち直接的過去を経て、直接的未来として時間的に展開する。したがって、アフェクシオンはまさしく私たちが問題としているプロセス、すなわち時間的展開のうちで不確定性を孕みながらも、行為へと確かに進展してゆく動的な過程を表現していると思われる[16]。

ただし、こうしたアフェクシオンだけで、動的な過程を語ること、あるいは自由行為そのものを語ることには限界があるだろう。というのも、自動的運動からの隔たりという契機がここでは見出されるものの、その際に、何を目掛けて行為がなされるのかということ、すなわち行為を導く要因がいまだ不明瞭にされているからである[17]。そのため、私たちは別の視点から、すなわち記憶の選択をめぐる議論について考察を継続する必要がある。

２-３　類似連合による記憶の選択

『物質と記憶』によれば、知覚において露わとなるような不確定性を身体は備えている。そして、身体が可能な行為のなかから選択を行う際に有効な手がかりとなるのが、想起される記憶である（cf.MM199）。つまり、前節では触れなかった身体運動の方向づけを行うのは、現実化した記憶であるといえる。とはいえ、現実化する記憶そのものもまた不確定性を孕んでおり、選択される余地を残している。自由行為の不確定性、選択性という側面を別の角度から検討するために、ここでは記憶の選択について照明を当てることにする。

では、想起される記憶はどのように選び出されるのだろうか。ベルクソンは知覚と記憶の観念連合によって説明を行う。その際に重視されるのは近接による連合ではなく類似による連合である。ベルクソンによれば、一見して近接連合とみられるものも、その根底には実は類似連合が存している（cf.MM97-98・181-183）。たとえば、ある知覚Ａと記憶Ｂが近接によって連合すると思われるときでも、実際には、知覚Ａが近接していた記憶Ｂを直接呼び戻したのではない。というのも、かつての知覚はもはや記憶であり、知覚そのものではないからである（cf.MM97）。そのため、知覚Ａはみずからに類似した記憶Ａ´をまずは呼び起こさなければならない。そうすることではじめて、記憶Ａ´は近接する記憶Ｂを喚

起することができる。ベルクソンはこのように、類似連合を想起の原理として位置づけるのである[18]。

そのうえで、類似連合について説明するためにベルクソンは行為に向けられた私たちの精神のあり方を示す円錐のモデルを用いる。円錐の両極は、行動の平面と呼ばれる頂点Ｓと、夢想の平面と呼ばれる底面ＡＢによって構成されている。私たちは精神が行為へと関心を向けている程度、すなわち「生への注意」（MM193）の度合いによって頂点Ｓと底面ＡＢのあいだの諸平面のいずれかのうちに身を置いている。

この円錐モデルは、同時に記憶の個別性の度合いを表現してもいる。一方で頂点Ｓにおいて、記憶はより「ありふれた（banal）」（MM188）性格を呈する。というのも、行動にのみ関心を抱くのであれば、受けた刺激を細部まで弁別するような記憶は現前せずに済まされるからである。他方、底面ＡＢにおいては、行動よりもむしろ思弁的な態度へと傾くので、個々の記憶が細密な個別性を保ったまま存在しているのである。私たちは生への注意に応じていずれかの平面に身を置く。このとき、諸々の記憶が持っている一般性・個別性の度合いが決定される、「並進運動」（ibid.）と呼ばれる記憶の運動が生じているのである。あるものは「ありふれた」ものであり、またあるものは個々の記憶を細部にまでわたって表現している。知覚や記憶それ自体が連合する力を否定するベルクソンは、私が身を置くことのできるこれらの諸平面を導入することによって類似の程度を規定しうると考えている。そして、「並進運動」と同時に、「自転運動」（ibid.）と呼ばれる運動が生じる。この自転運動によって、並進運動によって身を置いた平面の許容する類似性に応じて、身体の運動性に有用な記憶が現実化されるのである。

ベルクソンによれば、主体の側からの記憶の選択は以上のように行われる[19]。身体の運動傾向は外的な条件によって決定されるので、その側面に限れば想起は確かに私の自由にはならない。だが他方で、精神が身を置く意識の諸平面を生への注意に応じて選び出すことができるという点で、部分的ではあるが、喚起される記憶について私は選択権を持つことになる。

第１章で述べた躊躇や熟慮において、アフェクシオンの作用と類似連合によるこうした記憶の選択とが相俟って生じ、それが身体運動を導いていると思われる。とはいえ、『物質と記憶』における記憶の現実化は、以下の理由によってそれ自体では『試論』での自由行為と重なりあわないだろう。

『物質と記憶』において記憶が現実化する典型的な局面として語られるのは、「注意的再認」という現象である。注意的再認とは具体的には、細部にまでわたる対象の判明な知覚、聞き取られた語の解釈や数式の計算といった所作の総称であるが、そこでは主体の側からの「遠心的な」（MM146）働きかけが強調される[20]。つまり、対象の知覚をただ受動的にのみ受け取るのではなく、同時に主体は選び出された記憶によって、みずからの側から対象を「再構成」（MM111）するのである。

だが他方で、『試論』によれば自由行為は「日常的な状況」におけるありふれた行為のうちにではなく、生涯でも稀な「重大な状況」においてこそ見て取られる（DI128）。それに対して『物質と記憶』の注意的再認は、あくまで判明な知覚や計算といった日常的な所作であり、到底『試論』のいう特権的な行為と同じものではないだろう。

さらに、注意的再認に関してベルクソンは「遠心的な流れ」、すなわち私の側からの対象への働きかけを強調する。だが、それは対象の側からの「求心的な流れ」（MM142）と歩調を合わせたものであり、到達されるべきは、すでに与えられた対象の再構成である。そこで目指されているのは、結局のところ対象のより詳細な知覚や理解にすぎず、記憶の展開は眼前の対象にいわば拘束されている。それは記号的に表象される行為のように、あらかじめ到達点の決められた行為となってしまうだろう。記憶ないし精神の働きについてこうした記述にベルクソンがとどまっていたのは、『物質と記憶』が「精神と物質の交差点」（MM5）について明らかにするために、高度に緊張した持続からなされる重要な局面での自由行為よりは、むしろ日常的なレベルの考察、つまり「記憶力の実践的なしたがって通常の（ordinaire）働き、すなわち現在の行動のために過去の経験を利用する」（MM82）という「再認」の現象に考察を限っていたからだと推測される。

だが、後に書かれた論文「知的努力」において、ベルクソンは注意的再認に相当する事例を改めて取り上げつつ、しかもその延長上により高度な作用として創出（invention）について論じることになる。この論文においてこそベルクソンは『物質と記憶』の枠組みを踏まえながら、すでに与えられたものの再構成にとどまらない新しいものを生み出す過程を論じていると考えられる。それによって、記憶の選択が何に方向づけられているのか、つまり１-３末尾で述べたような自由行為における選択性と志向性の相関について明らかにすることができるだろう。それでは以下に、論文「知的努力」についての考察に移りたい。

第３章　論文「知的努力」における「動的図式」

３-１　動的図式によるイマージュの組織化

論文「知的努力」では『物質と記憶』で注意的再認として論じられた事象をふくめ、想起・知解（intellection）・創出において生じる知的努力について論じられる[21]。ベルクソンがここで新たに導入するのは、「動的図式」の概念である。動的図式はイマージュを潜在的な状態で含んでおり、前者から後者への展開過程において努力が生じるというのである。

以下では動的図式のこうした展開過程について考察する。ただし、ベルクソンは「展開」という語で動的図式とイマージュの関係を表現しているが、自分が図式とイマージュの二元論を取っているかのように、あるいは、なにか神秘的な実体のようなものが作用していると誤解されないために論文の後半では次のように弁明している。「通常の心理学」には「少なくとも、すべての表象を実在的あるいは可能的なイマージュと関連づけて規定しようとする傾向がある」が、動的図式はそれに対立するものではない。「心的な図式が規定されるのは、ただイマージュとの関わりにおいてのみである」（ＥＳ187）、と。つまり、動的図式は「イマージュそのものというよりは、むしろ〔想起の場合は〕再構成しなければならないものについての指示」（ES161）なのである。そのため、「展開」という概念よりもイマージュの側により焦点を当てて同様の過程を言い換えた、「組織化（organiser・organisation）」という語のほうがその内実を理解する手がかりとしてふさわしいように思われる[22]。そのため以下では、イマージュの組織化を軸としつつ動的図式について考察を行うこととする。

動的図式は、必要とされる諸イマージュを呼び集めるように働く[23]。そのとき、イマージュは外的な特徴によって選び出されるわけではない。ベルクソンは、図式を「問題」（ES188-189）と呼びなおしつつ、組織化について説明を行っている。組織化されるために選ばれるイマージュは、「問題」を解決するために必要な「力（puissance）」（ES189）を持ったものである。だが、図式は多くの場合、必要とされるイマージュを一挙に迷いなく選び出すのではない。組織化の候補としてある一定の類似性を持った範囲で諸イマージュが呼び起こされるのである。ただし、それらの類似は外見上のものではなく、「まったく内的」（ibid.）なものである[24]。

では、内的な類似性とはいかなるものか。２-３で行った議論を思い起こそう。類似は対象それ自体が持つ性質ではなく、みずからが身を置いている意識の平面に応じて決定されるのだった。論文「知的努力」においてもまた、『物質と記憶』におけるこのような記憶の選択と同じ枠組みで諸イマージュの選択が考えられているように思われる[25]。つまり、図式が求めるイマージュを得るために私は異なる意識の平面を横断する。それによって選択されたイマージュが徐々に組織化される過程が、図式からイマージュへの展開と呼ばれているのである。したがって、論文「知的努力」におけるイマージュの組織化においても、『物質と記憶』における記憶の選択と同様の過程が存在しているように思われる。それは、そのつど身を置いている意識の平面に従った、いわば私の側からの遠心的な対象の「意味」（ES189）付与と呼びうる作用だろう[26]。

逆に、動的図式が存在せず、あるいはそれを考慮しないのであれば、適切な平面上に身を置くことはできない。その際には諸々のイマージュは図式へと組織化されるべき意味を担わず、機械的な寄せ集めにすぎないものとなる。たとえば、身体の習慣性のみによって反応的に想起する場合（cf.ES168）や、純粋に単語だけを手がかりに観念を理解しようとする場合（cf.ES172）、日常会話で意味を考えずにありきたりの返答をする場合（cf.ES168-169）

などがそうである。これらの際、私は「同一の平面」に身を置いている。このとき私は図式の展開にそのつど必要とされる特定の類似性を帯びた一群のイマージュを得るべく、すなわち諸対象にしかるべき意味をそのつど付与するべく、意識の諸平面を移動することを放棄している[27]。その場合にはイマージュは有意味な連関なしに、ただ機械的に寄せ集められているにすぎない。イマージュが図式と関わりを持たない場合、それらはただ「共通の意図なしに相次いで継起する」（ES188）のである。また、図式とは無関係に、知性に頼ってイマージュの構成を試みる場合にも、それは「ただ過去をそのままやり直すか、過去の凝結した要素を取り上げて、違った順序でモザイクのように組み替えることだけしかできない」（ES188）のである[28]。

さて、このようにして図式はイマージュへと展開、ないしイマージュを組織化するのだが、それが容易に行われる場合に努力が生じることはない。努力が生じるのは、「複雑さ」（ES186）がある場合である。その場合には、図式はイマージュを組織する際に、一定の類似性の枠内でイマージュを選び出すが、ふさわしいものが定まるまで、諸イマージュは相互に干渉し、容易には組織化は遂げられない[29]。ときには図式に導かれることで組織化可能なイマージュが得られないこともあるが、その場合には、組織されたイマージュそのものの作用によって、図式そのものが変化することもある（cf.ES175-176）。その意味で、図式は「仮説的」（ES172）な手がかりにすぎない。こうした、図式の展開に至るまでのイマージュ間の相互作用、あるいは図式とイマージュ間の影響は「まったく特別な躊躇」（ES177）と呼ばれている。それは、イマージュが組織されるまでの「待機の時間」（ES177）である[30]。つまり、努力とは時間の経過のうちでなされるイマージュの組織化のプロセスなのである。

そして、以上の過程は、もっとも高度な知的努力である「創出の努力」において、とりわけ顕著に見て取られる（cf.ES182）。創出とは、具体的には、「機械」（ES174）の発明[31]や芸術作品の創造（cf.ES175）である[32]。そして、ベルクソンは創出を「産出（production）」と呼び、すでに眼前にある対象の「再現（reproduction）」にすぎない想起や知解から区別している（cf.ES155）[33]。この創出の努力においてこそ、『物質と記憶』では語られなかった行為、すなわち『試論』の自由概念と重なりうる、あらかじめ与えられていない新しいものを生み出す行為が述べられていると思われる。だとすれば、ここに至って１-３で立てた問い、すなわち持続が行為として展開される際の不確定性と志向性を孕んだ過程に関する問いについて検討することができる。以下に、テキストの連関について整理し、不確定性と志向性をめぐる問題を検討することで考察を締めくくることとしたい。

３-２　動的図式の不確定性と志向性

まずは論文「知的努力」と『試論』の関係について指摘しよう。論文「知的努力」によれば、努力感とともに躊躇しつつ展開される時間的プロセスのうちで、動的図式はイマージュへと展開される。このプロセスは、躊躇の過程であるという点、時間のうちで展開するという点、努力という活動性と不可分であるという点で、私たちが『試論』に見いだした行為へのプロセスと同様のものであると思われる[34]。だとすれば、動的過程において行為を先行的に形成する志向性とは、動的図式によって成立しているということができる。

そして、この解釈によって『試論』と『物質と記憶』における自由論の連関もまた、おのずから明らかとなる。動的図式の展開とはイマージュの組織化であり、そこには『物質と記憶』で論じられた類似による連合が作用しているのだった。とすれば、行為へと至るまでの熟慮や躊躇において行われているのは、『物質と記憶』が述べていた類似連合による記憶の選択ではないだろうか。

また、躊躇において身体の側で生じている事態を内的に与えるのがアフェクシオンである。それは、身体機構の不確定性を背景として、即座に返される反射的行為から隔たった運動傾向を表現していた。実際、論文「知的努力」においても、諸々のイマージュが相互に葛藤している場合には、「身体の不安定性」（ES183）が生じるとされる。知的努力は直接にはこうした身体の状態において感じ取られる。このように、行為への動的過程における不確定性とは、一方では類似による記憶の選択、他方ではアフェクシオンによって構成されていると思われる。

したがって、位相を異にしていると見られがちな『試論』と『物質と記憶』の自由論は、単なる並列関係にあるのではないだろう。『物質と記憶』は選択の自由を語ることによって、ある側面から『試論』での議論そのものに成立根拠を与えている。このように、『試論』は論文「知的努力」のみならず、『物質と記憶』とのあいだにも内的な連関を有する著作なのである。

さて、以上を踏まえ、まずは行為への動的な過程における不確定性について吟味しよう。『物質と記憶』において不確定性はアフェクシオンと記憶の選択によって描き出されていた。アフェクシオンは行動を照らし出すべく選択された記憶によって導かれるのだが、さらにその記憶は動的図式によって方向づけられていた。さらに言えば、不確定性のうちでの選択は動的図式の展開そのものを構成している。というのも、動的図式は時間のなかで展開するのだが、その時間を構成するのが不確定性において選択を行う過程に他ならないからである。それは無差別自由のように、到達点への志向と切り離され、そこへ至る展開と区別された選択ではない。その選択は動的図式へと向かう展開そのものとしての選択、すなわち志向性と結合した不確定性である。したがって、ベルクソンの議論では確かに行

為の選択の余地が認められてはいるが、その選択は無差別性を含意してはいないのである。

では、志向性についてはどうだろうか。行為への志向性を担うのは動的図式であるとして、それはイマージュとは次の点で区別される。イマージュは、自分自身を実現する手段をすでにみずからのうちに示している（cf.ES174）。だが他方で、図式という目的を達成する場合、その手段は「出来合いのものとして」（ES188）、即自的／即時的に提示されるのではない。ここでも、上で述べたように、図式の展開過程が選択のプロセスそのものによって構成されていること、すなわちそれが時間的過程であることが想起されるべきである。動的図式は、現実化される諸イマージュの関係を時間の展開に沿って「生成の言葉遣いで、動的に」（ibid.）導く。それは、換言すれば、イマージュの指示が一挙には与えられないということ、あるいは時間の経過を要するということと同義である。

したがって、図式が必要としているのはどのようなイマージュであるのか、躊躇の過程そのものによってしか知ることはできない。そうでなければ躊躇する必要はなく、すぐさま必要なイマージュを選び取ることができるだろう。図式とはあくまで「イマージュ化された表象とは、はっきりと異なった表象の様態」（ES189）であり、目下解決されるべきであるが、その解決手段は試行錯誤の末にようやく提示される「問題」（ES188-189）なのである。この点で、ベルクソンの議論は連合主義的決定論とその構造を異にしている。後者の場合は行為をすでに与えられたものとみなすと同時にそれに対応する先行条件を特定し、両者を必然的に連合させているからである。したがって、動的図式による行為への志向性は、記号的表象が含意するような行為の先取と同じものではない。

以上のように、無差別自由論と連合主義的決定論の双方を批判するベルクソンにとって要となるのが、不確定性と志向性の相互補完的な結合である。そして、不確定性と志向性が矛盾なきものとして調停されているのは、動的過程がまさしく時間のうちで展開するからに他ならない。さもなくば、すでに決定された行為の先取か無差別的な決定のいずれかを排他的に選択するほかありえなかっただろう。時間のうちで折り重なる不確定性と志向性こそが、ベルクソンが熟慮や躊躇という何気ない言葉に託した自由論の賭金なのである。

本論で参照したベルクソンの著作および略号

DI：*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.
『意識に直接与えられたものについての試論』
MM：*Matière et mémoire*, 1896.
『物質と記憶』

EC：*L'évolution creatrice*, 1907.
『創造的進化』
ES：*L'énergie spirituelle*, 1919.
『精神のエネルギー』
PM：*La pensée et le mouvant*, 1934.
『思想と動くもの』
（※以上のテキストに関しては P.U.F.の Quadrige 版を用いた。）
M：*Mélanges*, Paris: P.U.F., 1972.
『メランジュ（雑録集）』
CⅡ：*Cours Ⅱ*, (éd.par H.Hude et als.), Paris: P.U.F., 1992.
『ベルクソン講義録Ⅱ』

[1] 以下、本論では『試論』と略記する。
[2] 杉山直樹氏は持続としての時間と自由行為との連関について、とりわけ明快な整理を行っている。すなわち、持続の形成する全体性、反復されることのない心的状態の時間的継起という二つの点で、『試論』の時間論は自由を可能にしているということが指摘されている。cf.杉山直樹『ベルクソン　聴診する経験論』創文社、２００６年、２９-３８頁。そのうえで、本論ではこうした観点には尽くされないような時間と自由の関係について照明を当てたい。
[3] 論文「知的努力」は１９１９年の『精神のエネルギー』に収録されているが、論文自体が書かれたのは『物質と記憶』と『創造的進化』（１９０７年）の中間の時期となる１９０２年である。
[4] 本論と同じく「熟慮」に着目して両著の自由概念を架橋した論考には次のものがある。cf.内山智子「ベルクソンにおける自由の二側面の統合」『倫理学研究』第３６号、晃洋書房、２００６年。本論では、熟慮が時間的な過程である点、そこで「動的図式」が作用している点に注目し、熟慮という過程そのものに関する掘り下げを試みた。
[5] ベルクソン研究において、論文「知的努力」はともすれば単独で扱われがちなテキストであった。ヴォルムスは、「知的努力」は他の著作と内的関係を持つが、そのことはしばしば見過ごされてきたことを指摘している。cf.Frédéric Worms, *Introduction à* Matière et Mémoire *de Bergson*, Paris: P.U.F., 1997, p.183.
[6] 実際のところ、ミルは必然的な決定論者とまでは言いがたい。ベルクソンの理解には、当時のフランスのミル受容のバイアスを垣間見ることができる。cf.杉山直樹「Ｊ．Ｓ．ミルとフランス・スピリチュアリスム」、『学習院大学文学部研究年報』第５０号、２００４年。
　また無差別自由論者としてよく知られているのはデカルトであるが、ベルクソンも実際、デカルトを念頭においていると見られる（cf.CⅡ240）。
[7] また、どの行為も同様に可能だとする無差別な自由は、少なくともそれ自体では、何らの方向性をも持たない無軌道で空虚な行為である。例えばルヌヴィエは無差別自由を道徳や合理性とは無縁の「不条理（déraison）」であると断じている。cf.Charles Renouvier, *Traité de psychologie rationnelle d'après les principes du criticisme*, t.1, Paris:Librairie armand colin, 1912,ch. ⅩⅢ.
　それに対してベルクソンの自由行為は、本論が以下で示すように、そのつど一定の志向性を持つ。ベルクソンにおいて自由行為とは私にとって無差別＝無関心な（indifférent）ものではなく、行為がみずからにとって切実な意味を持つ「重要な状況」（DI128）においてこそ行われるのも、このためだと思われる。
　さらに言えば、『試論』のベルクソンは、自由行為が目指すものについて具体的な輪郭を

いまだ十分に与えてはいないことは確かである。けれども、自由行為がただ偶然的なものではなく一定の志向性を備えているからこそ、後に『道徳と宗教の二源泉』で語られるような道徳的な価値を帯びた行為としてその内実が充填されることも可能なのではないか。したがって、無差別性の批判は『試論』においてただ偶然に立ち寄られた論点ではないと思われる。単なる空虚な行為ではない自由のリアリティを確保するという点、そして後のベルクソン哲学の展開とも関わるという点で、この議論が担う射程は軽んじられてはならない。

[8] ベルクソンは自由行為への途上にある自我を、「躊躇そのものの結果によって生き発展するひとつの自我」（DI132・強調引用者）と述べている。

[9] 次の箇所は熟慮そのもののうちに決意が織り込まれていることを述べている。「決意は熟慮のどの瞬間にもあらわれていて、熟慮の原因である。」（M706）

[10] 心理的状態による決定を導入することで無差別的な行為を回避し、しかもそこに自由を確保するベルクソンの自由論について、ジャンケレヴィッチは「有機的必然性」という端的な表現を与えている。以下の本論が企図するものは、言うならばこの「有機的必然性」という性格の解明でもある。cf.Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, Paris: P.U.F., 1959, p.79.

[11] ブランシュヴィックによる批判に応答した１９０３年の書簡を参照しよう。そこでは、知性、意志、感情の相克といった「諸能力の心理学」によって自由を主張しているわけではなく、自由は「心理的因果性」そのものであると述べられている（M586）。すでに取り上げた躊躇や熟慮といったものは心的状態そのものであり、それと独立して存在するような何ものかではない。ちなみにこれは『試論』よりも後の書簡であるが、『試論』より後のベルクソン哲学で自由概念が別の側面から語られることはあっても、『試論』の自由概念は維持されていると本論では解釈する。

　また、グイエは『試論』における「心理的因果性」が後の著作で「創造」の概念に取って代わられたことに関して、ベルクソンの本意がより正確に表明されたものだとして積極的に評価している。cf.Henri Gouhier, *Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*, Paris: Vrin, 1989, pp.46-50.確かに用語法のうえではグイエの指摘するとおりだが、「創造」が語られて以降も無差別的自由は批判的に扱われていることからも（cf.PM10）、やはり先行する心的状態による決定という側面はベルクソンの自由論において維持されていると思われる。グイエはそもそもベルクソンの自由に「決定（déterminer）」を見ることを避けようとする。cf.Henri Gouhier, *Bergson et le Christ des évangiles*, Paris: Vrin, 1999, pp.59-60.しかし、本論の考察からも分かるように、そうした解釈は妥当ではないと思われる。

[12] この箇所への着眼に際して、村山達也氏の論考とそれに対する杉山直樹氏のコメントから有益な示唆を与えられた。ただ、村山氏は力が私の意識の与件であることに注目しつつ『試論』の枠内で考察を行っているが、本論では他の著作との関わりを含めてこの箇所を解釈する。村山達也「ベルクソン『直接与件』における自由をめぐる四つのテーゼ」『実存思想論集』第ＸＸIII号、理想社、２００８年、１６７-１７２頁。

[13] 『物質と記憶』で語られる選択としての自由概念は、一見して『試論』とは別種のものであるように思われるが、本論では『試論』の自由を継承したうえで別の側面から光を当てているのだと解釈する。実際、『試論』の自由論と同様、過去の全体の表現、予見不可能性といった行為を述べている箇所（cf.MM192）や、決定論／無差別自由の批判とみなせる箇所（cf.MM207）は確かに存在している。また、フランス哲学会での討議（１９１０年）においてベルクソンは精神的自由（liberté morale）のみならず、無差別自由ではない限りの自由裁量（libre arbitre）として選択の自由をも認めている（cf.M833-834）。

　さらに以下のシュヴァリエとの対話（１９３８年）では、『物質と記憶』の考察の際に『試論』の自由が念頭に置かれていたことを示している。「私は、『試論』の発表以前にすでに『物質と記憶』に着手していたと言ったが、『試論』を発表する前に、しばらく寝かせてお

いて、提起される問題を考察していたのだ。そこで、私は『直接与えられたもの』の結論が身体と精神の関係についての特別な研究を必要としていることがわかった。なぜなら私は、科学が教えているように見えることすべてに反対する、精神的事実としての自由に到達していたからだ。」（Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Paris: Plon, 1959, p.278.）

だが、これらはテキストの字句レベルでの表面的な指摘にすぎないことも確かである。ここから『試論』と『物質と記憶』の自由論が少なくとも並列されていることは推測されるが、より重要な課題は両者のあいだにありうる内的連関を問うことである。それについては本論の結論部で検討したい。

[14] 「affection」は感情や情緒などと訳されることもあるが、その場合、外的刺激によって被られた身体的変状という原語のニュアンスが伝わりづらいと考え、本文の表記とした。

[15] この点に関して杉山氏による示唆を参考にした。cf.杉山直樹「ベルクソンにおける生成と身体性」『カルテシアーナ』第１３号、１９９５年、４２-４３頁。

[16] 展開しつつある、あるいは一種の遅れであるというアフェクシオンの性格は、杉山氏が指摘するような持続の「未完了相」としてのありように対応すると思われる。cf. 杉山直樹『ベルクソン　聴診する経験論』創文社、２００６年、７８-８３頁。また次の箇所も参照。「時間は遅れさせる、あるいはむしろその遅延なのである。」（PM102・強調引用者）このように、自由行為と時間の連関はアフェクシオンという局面に部分的に表現されている。

[17] ベルクソンは批判者たちに応じつつ、自由とは感覚的な自発性に還元されえないと明確に述べている。自由は「諸々の感情（sentiments）と観念の綜合」（MM207）であり、ある種の合理性を持った行為なのである。

[18] ベルクソンによる類似の連合はいわゆる連合主義の主張するものとは別のものである。連合主義は、知覚それ自体のうちに特定の記憶と連合する作用を前提している。だが、意識の諸平面が見落とされているため、ある知覚がある記憶を喚起したとして、連合主義はほかならぬその記憶がなぜ喚起されたのかを説明することができない（cf.MM182）。

[19] ベルクソンは『試論』において連合主義心理学のアトミズムを批判していた。だがこの批判は、ベルクソンの語る限りでの類似連合のメカニズムと齟齬をきたさない。というのも、類似連合の背景にある並進運動、自転運動において記憶は分割されず、つねに全体として存在しているからである（cf.MM188）。たとえば行為を決定する際に表れる「性格」（MM162・164・192）において、総体としての記憶の反映を見ることができる。そこでは現実化される記憶が、『試論』に言われるように潜在的な記憶と相互に浸透しあっていると思われる。

[20] 記憶が解釈や計算に関わるということは、奇妙な印象を与えるかもしれない。だが、『物質と記憶』において脳をはじめとした物質が現在に位置づけられるのに対し、そこに還元できない精神のあり方は保持された過去としての記憶に見いだされる。そのため、精神と記憶の作用はおおむね同一視されるのである。

[21] このうち、知解の作用は『物質と記憶』で注意的再認として論じられた計算や語の解釈に対応している。

[22] 別の箇所ではベルクソンは「芸術、科学、道徳のみならず、人間本来の発見のすべて、文明全般」（CⅡ369）に関わるものとして、注意による組織化の作用を述べている。

[23] それは次のように描かれている。「心的な努力」によって「表象は、他の全ての表象から孤立する。というのも、組織化する図式は、図式を展開できないイマージュを排除し、それによって意識の現実的内容に真の個体性を与えるからである。また他方でこの表象は、しだいに多くの細部で充たされる。というのも、図式の展開はこの図式が同化できるすべての記憶とすべてのイマージュを吸収することによってなされるからである。」（ES184-185）

[24] そのため、「継起するイマージュは、相互にどのような外的類似性もないことがありう

る」（ES190）

また、努力を要する想起についてベルクソンが挙げるのは、盤面を見ずに同時に複数の相手と対局するチェスの名人の例である。彼が記憶しているのは、駒の外見的特徴ではなく、その「力の構成、あるいはむしろ味方と敵の力の関係」（ES163）である。この場合も、想起の際に展開されるイマージュは、私の側から意味づけられた対象の性質である。

[25] ベルクソン自身、論文「知的努力」と『物質と記憶』の連続性を示唆している（cf.ES155・167）。ただそのうえで、両者には相違する点があるのも確かである。つまり、『物質と記憶』では円錐モデルが語られていたのに対して、「知的努力」ではピラミッドのモデルが導入されているのである。ドゥルーズの指摘によれば、両者は同一のプロセスではない。cf.Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, Paris: P.U.F., 1966, p.63.本論も、両者が別のものだという点を認めつつ、そのうえで、「知的努力」ではピラミッドのみならず円錐モデルが前提とされていると考えるが、それは次の理由による。

ピラミッドのモデルが示すのは図式の展開過程であり、図式はピラミッドの頂点に位置づけられている。たとえば、想起の努力に関してはこのように言われる。「想起するときが来れば、私たちはピラミッドの頂上から底へと再び降りていくだろう。〔……〕そこでは、単純な表象が複数のイマージュへと分散し、イマージュがフレーズと語に展開する。」（ES160）こうした過程に、円錐モデルの示すような類似の諸段階が表現されているとは思われない。仮にそうだとすれば、より底面に近い部分に個別性の高い記憶が位置し、そして頂上の動的図式がもっとも個別性を欠いた、ありふれた記憶だということになってしまうからである。ピラミッドは記憶の展開過程を示すものであって、記憶の個別性の度合いを表現するのではない。

にもかかわらず、「知的努力」の議論には、特定の「知的な調子」（ES171）によって身を置くべき、類似の諸段階を表現する意識の平面が必要だと思われる。というのも、『物質と記憶』同様、機械的な要素の結合と区別される、内的類似によるイマージュの組織化が語られているからであり、とりわけ知解の努力については、ほとんど同様の過程が描かれてさえいるからである。これらが可能となるには、やはり円錐と意識の諸平面の概念を、「知的努力」の前提として考慮に入れざるをえない。

[26] 図式がイマージュを選択するものであれ、あくまでその過程を「図式からイマージュへの展開」といった名で捉え、とりわけテキストの前半部では多用しているのは、図式のこういった遠心的な性格を強調してのことではないだろうか。仮に、その過程が「イマージュによる図式の構成」と呼ばれていたとしたら、それ自体が牽引力を持つイマージュの機械的な、あるいは連合主義的な累加を連想させてしまうだろう。

[27] 想起の対象への意味付与はむしろ、機械的な想起を妨害する（cf.ES158-159）。

[28] ここには『創造的進化』で展開されることになる、知性による製作批判が垣間見えている。

[29] 「あらゆる知的な努力のなかには、一つの図式のうちに入ろうとして、押しあい、ひしめきあう可視的なあるいは潜伏した多数のイマージュがある。〔……〕したがって、心的な努力は組織化の途上にある知的な諸要素があるところにだけ存在する。」（ES185）

[30] 次の箇所は時間がむしろこうした躊躇そのものであることを語っている。「生命体が持続するのは、まさにそれがたえず新しいものを練成し（élabore）、練成にはかならず探求（recherche）があり、探求にはかならず模索（tâtonnement）があるからである。時間はこうした躊躇（hésitation）そのものであるか、そうでなければまったく何ものでもない。」（PM101・強調引用者）

[31] 『創造的進化』で論じられる機械の製作には、知性の作用が関わっており、こうした創造行為と区別される。ただし、創出そのものと創出の結果を区別して前者に創造性を見ている箇所もある。（cf.EC184）

[32] 『物質と記憶』によれば、人間の心理を描き出す「魂の画家」（MM189）、すなわち小説家は意識の諸平面を適切に移動することで作品を創作する。また、「類似は生命的」であり「芸術の範囲に属する」とも言われている（PM60）。こうした箇所は、芸術的な創造にとって類似を介したイマージュの組織化が関わっていることを示しているように思われる。

また『創造的進化』においては、意識を呼び起こす選択の可能性が、創造の可能性に結びついているとされる（cf.EC262）。選択に伴い現れる意識そのものが、創出や自由そのものと同一視されている箇所も参照のこと（cf.EC264）。

[33] ジャンケレヴィッチは、論文「知的努力」では『物質と記憶』に比べて、遠心性の側面がより強調されていることに注目している（cf.op.sit.p.112.）。こうした点は、対象の再構成へと解消されない創出の努力において確認できるだろう。

[34] 自由行為における動的図式の作用についてはジャンケレヴィッチも指摘している。「この予感のおかげで私たちに与えられる直観は、〔……〕遠心的なあの「動的図式」と同じ秩序を持っており、〔……〕非常に過疎的なある種の志向あるいは志向的状態である。」（op.sit.p.67.）

また、講義「意志についての諸理論」（１９０７年）では、注意の際に作用する「図式」を語り、その延長上に熟慮の過程について述べている（特に cf.M704-706）。さらに、熟慮について語る際にはまさしく「心的因果性」という概念を用い、その過程を次のように述べている。「おそらくある意味で、あらかじめ課せられた目的は存在する。しかし、それは可変的であり、意志がそこに努力を向けているあいだは進行するものである。したがって、こうした過程を本質的に特徴づけるのは、それが連続的な錬成であり、発展の連続であり、すなわち本来の意味での持続であるということである。」（M715）ここで言われている「目的」とは「図式」を意味すると思われる。本論で解釈したように、ベルクソンが行為へと達する動的な過程を図式の概念と関連付けていることは、このテキストからも裏付けることができる。

さらに、論文「知的努力」末尾で言われているように（cf.ES190）、図式が作用因でも目的因でもない因果性に関わるという点はこの講義でも指摘されている（cf.M715）。そして、１-３に述べたように、本論の主題である自由行為の動的な過程は因果性としても規定されうるものだった。この講義を通して、自由を可能にする因果性という観点から、『試論』と論文「知的努力」を結ぶ道筋を読み取ることもまた可能である。